

## コラム

## 戦略より人命を

日露戦争が始まったころ、ロシアのウラジオストック艦隊が日本海に出没して、日本の輸送船団に脅威をあたえていた。この脅威を封ずる任務を負っていたのが上村彦之丞大將ひきいる上村艦隊（出雲以下4隻）であった。

明治37年8月14日、上村艦隊は蔚山沖を南下するウラジオストック艦隊（リューリック巡洋艦以下3隻）を発見し、直ちにこれを追跡した。そして猛烈な砲火をあげて、ついにリューリック艦は撃沈させたが、しかし他の2隻は撃破しながらもウラジオストックに逃がしてしまった。2隻が逃げられたのは、上村が追跡するのを止めて、それよりリューリック艦の沈没現場にもどって、海面にただようロシア兵を救助したためであった。その時、救い上げたロシア兵は実に627人で、日本の各艦ともこのロシア兵で一杯であったという。

このことを知った多くの国民は「敵の漂流兵など救う必要はない。戦略上逃げる2隻こそ絶対に逃がすべきではなかった」と云って上村を激しく非難した。しかしその非難のなかにあつて、高木兼寛は敢然と上村の人命救助に味方したのである。ある講演で彼はこう述べている、「上村大將が、救いを求めて漂う敵国水兵をみて、これは可哀相であるから全員救い上げると命令されたのは、世界に無類の立派な行為であります。これを知った外国人は、日本人は奇態だ！俺の国だったら放っておくだろう、と云い合つたと聞いております。しかしそもそも大和魂にはこのように優しいところがあるのであります！」と。兼寛のこの発言は恐らく、異国の海で溺れ死

ぬロシア水兵の苦しみと、それを故郷で聞かされる家族の悲しみを十分察してのことだったと思われる。

兼寛はそのころ、慈恵医学校に学生の人間性を養うという目的で「明德会」なる講座をひらいている。講師として名僧大徳を招いて毎月一回その講義を拝聴するのである。医師には病者の痛みや悩みに共感し、これをいたわる感性が必要である、上にみる上村大将のようなやさしい心が必要である。他の医学校では医学・医術の教育のみでこと足れりとしていたのにたいして、兼寛は何とかこの医師の感性までも教育しようとしたのであった。そしてその結果は、兼寛が期待した通り、多くの人間性ゆたかな医師を輩出していったのである。かつて「本郷の学理、芝の臨床」と評され、慈恵の臨床医学が東大の研究医学に対置されたことがあったが、それは慈恵の卒業生がいかに病者の身になって診療したかを示す証左であった。昭和初期まで30年ちかく続いた「明德会」の存在意義はたしかに大きかったのである。

一方、「明德会」は同時に一聴聞者としての兼寛自身の宗教的境地をも深めていった。晩年の兼寛の一日は、感謝から始まって感謝で終わったといわれる。毎朝、神棚の前で祝詞を上げ、仏壇のまえで丁寧にお祈りし、さらに食事の前には、農夫のブロンズ像に麦飯を捧げ、感謝の合掌をしてから戴くという具合であったという。まさに神仏にたいする感謝の生活だったのである。

学生の教育にたいしても、晩年にはかなり宗教的雰囲気があったようで、加藤義夫教授の手記によると、「学生や若い医師が煙草の吸殻を道に捨てたり、鼻紙を床に捨てたりするのを見つけられると、先生は非常に怒られ、『それは君のために尽くしてくれたものではないか、捨てるべきところへ捨ててこそ報恩感謝の念を表す道である』とこんこんと諭された」という。ここには人にたいする慈しみ

のみならず、自分のために役にたってくれた物すべてにたいして感謝している姿がみられる。晩年の彼はかなり一切衆生悉有仏性（万物すべて神仏あり）にちかい境地にあったように思われる。